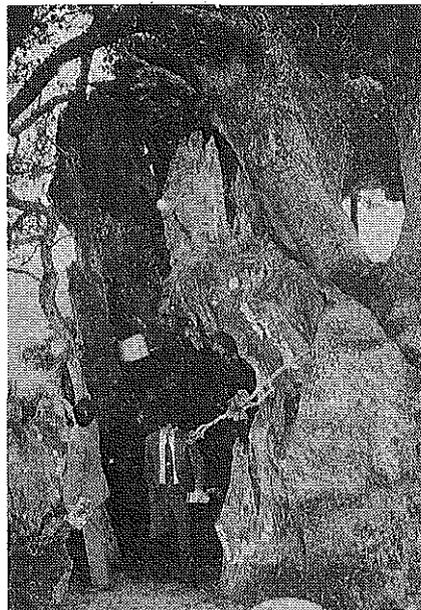


# よか YOKANET ネット

NO. 3

1993. 5

本庄の大クス：福岡県築上郡築城町下本庄の大楠神社境内にある高さ23m、根回り32mの大楠で、樹齢は約1800年。景行天皇が熊襲征伐の戦勝を祈願して植えた二本の常盤木の一本が残ったものという。日本三大クスとしても有名。1922年国の天然記念物に指定、地元のシンボリック的存在となっている。



## も く じ

### ○NETWORK・ネットワーク

2. 地域における文化・科学技術の推進
7. 障害を持つ児の母親の現在の生活について
9. 産直ドラマは手作りの味

### ○見・聞・食

11. テナント式伝統工芸村「ゆのくにの森」
12. 神戸・布引ハーブ園を訪ねて

### ○近 況

13. 春・溪谷にてー英彦山キャンプ場ー
14. 築城町「本庄の大クス」
15. フレッシュマン紹介
16. さらば白木原のネオン街よ...
16. 阿蘇山の雲海

## 地域における文化・科学技術の推進

### 住民参加のファンド形成

前号で知的インフラストラクチャーについて書いたところ、いろいろな意見を頂きました。またその間「新社会資本」ということが景気対策として出てきました。ところがこの社会資本は、一部で科研費などを含めるといふ議論が出ているものの、ハードウェアとしてのインフラが対象です。私共はこのような社会資本が、その時代を築く重要なものかと思いつつも、次の時代に向けた整備は、文化・科学技術の基盤（活動の仕方やそれを支えるシステムも含めて知的インフラとする）を強める必要があると考えてきました。そしてそれはあらゆる地域で不可欠であると思います。このような問題意識でNIRA（総合研究開発機構）へ研究助成をお願いし、大学の先生方でチームを作って頂き、一応まとめることができました。以下に記載する文章はそのうち糸乗が担当した「序文」と、読み物になりそうな「ケーススタディー」です。なおこのレポートは6月中に印刷される予定です。

#### ●序文●

この研究は、今後の地域社会の発展の最も重要な基盤をなすものが、“知的インフラストラクチャー”であることを示すために行ったものである。

日本の近代100年の成功は、明治当初からのインフラストラクチャー整備によるものとみられる。それは世界的にも大きく評価され、発展途上国のモデルとして見られてきているが、最近では社会主義諸国の行きづまりを打開するモデルになると見られたり、教育制度の面ではアメリカでもモデルにしようとする動きが出ている。この経過を簡単にたどってみると、次のようなプロセスがうかがわれる。

#### ①意識・アイデンティティの一致

日本の植民地化を防ぎ、早く近代国家になろうという思想が国の指導者層の多数をとらえていた。

#### ②ソフトインフラの整備

まずはじめに取組んだのは法制度の確立と教育制度の整備であった。いち早く欧米へ留学生を送り、近代国家のシステム、科学技術などを学び、それを日本に導入した。また、それらを定着させるために初等から大学までの教育制度を整備した。これは、全国をひとつの均質な社会として築くための知的インフラづくりである。

#### ③ハードインフラの整備

鉄道、道路、港湾、郵便、電話、電力などが

全国にはりめぐらされた。ハードの面での均質なインフラ整備となった。

④全国的な画一的で効率的な基盤による工業化

②の教育制度が生み出した均質で質の高い労働力と③の全国的にはりめぐらされたハードインフラが、法制度のもとで、治安の安定した社会を工業化する基盤となった。

⑤第2次大戦後の建設を通じて、世界的な経済大国、高所得水準の社会へ。

また、第2次大戦後の復興期だけをとってみても①～④と同様の次のようなプロセスがみられる。

①民主日本の建設と財政復興という国民的な合意形成

②それに対する法制度と復興計画（傾斜生産方式）

③ハードインフラ（石炭、電力、輸送など）に対する傾斜投資と農業振興による食糧増産

④重点地区を決めて（工業特別地区、新産都市など）工業化の推進を図ると共に、技術導入に対する政府の支援

これらのプロセスの①と②が知的インフラをなすものであると考えられる。

本研究では、このような問題意識の上で、①インフラ概念の整理、②地域での多様な研究活動の必要性、③九州の伝統、④それを踏まえた九州で考えるべき知的インフラ支援の市民機構の提案を行った。

## ●市民参加による知的インフラ形成への活動●

一川を美しくする活動で生まれたまちづくりと産業創造（柳川市）－

〈柳川の水の再生が何をもたらしたか〉

柳川の水がよみがえった話をきこうと思つて、まず「柳川の水がきれいになって観光客もずいぶん増えたでしょうね」といったとき、「我々は観光のことなど全く念頭にありませんでした」という、かなりきつい反発を受けた。「ただ何とかして、美しかった柳川の水を取り戻したかったのだ」という自負は極めて強い。しかし、現実の問題としてみると、「水を取り戻したこと」の観光への効果も極めて大きいと考えられる。

しかし、その河川浄化は、観光のために行つた時には失敗し、観光のことなど念頭になく、ただ「水を取り戻さないと柳川はなくなる」という思いから始めたとき、水も守られ、観光の柱にもなったといえよう。そして今、観光は市の産業の柱ともなっている。

〈柳川の水にかかわる動き〉

①飲料水であった

- ・ 1896年（明治29年）「飲用河川取締規制」
- ・ 柳川藩時代から飲用水としての管理はきびしかった
- ・ この辺一帯は感潮域であるため、井戸水に

は塩分が含まれていることが多く、飲用にも農業用水にも不適なものが多い

- ・堀にたまった水が、農業用水として、繰り返し使われた(足踏み水車)

#### ②上水道が普及、舟運も陸上輸送へ

- ・1953年(昭和28年)、西日本大水害
- ・1954年(昭和29年)、上水道一部通水開始
- ・飲用水でなくなり、人々の川を大切にす  
気持ちがうすれ、ゴミ捨場となりはじめる
- ・1960年(昭和35年)、矢部川上流にダム建設、貯水開始
- ・矢部川からの通水が減り、川の流れが悪くなる

#### ③観光川下り舟のはじまりと行きづまり

- ・北原白秋没後10年(1952年(昭和27年))に火野葦平らが来て、農業用の川舟10隻くらいに分乗して提灯行列
- ・翌年も「面白いじゃないか」と再び柳川を訪れ、川舟で提灯行列遊びをし、白秋祭を行う
- ・1961年(昭和36年)、三橋町で観光用川舟20~30隻つくられ、川下り始まる
- ・川舟が一部通れなくなる(1967.8頃)

#### ④浚渫の行きづまりから堀割の埋立計画へ

- ・1968年(昭和43年)、3か年計画で市が第1期浚渫
- ・浚渫後もゴミ捨てはとまらず、堀が深くなったので、捨てたものがわかりにくく、捨

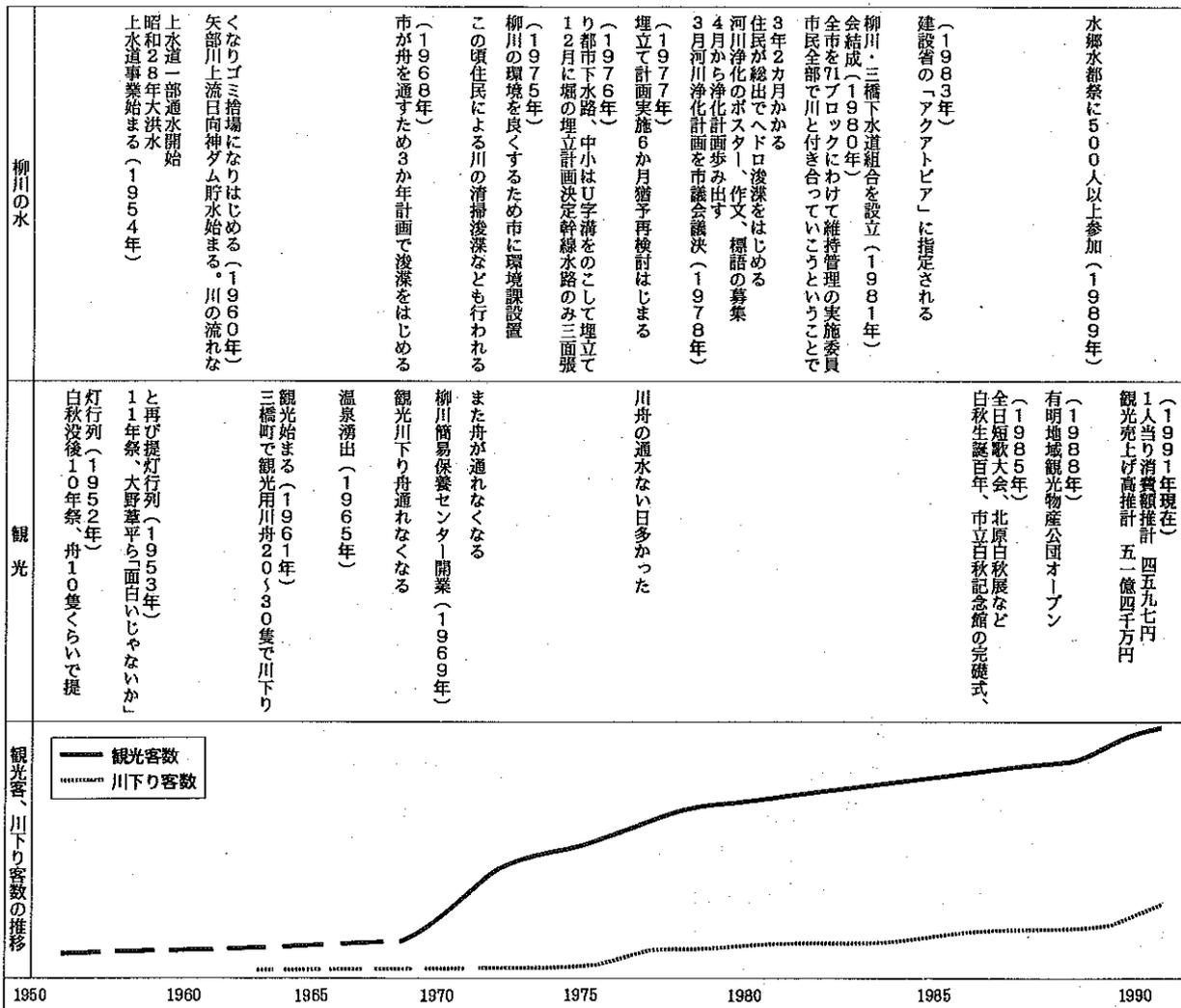
てやすくなった面もある

- ・観光舟の川下りのためという目的の浚渫ということで、住民の支持が少なかったのかもしれない
- ・蚊の異常発生、悪臭などひどく“ブーン蚊都市”とマスコミにやられる
- ・4年後(昭和49年頃)、また舟が通れなくなる
- ・堀の上を勝手に私物化する不法占拠などもおこる
- ・1975年(昭和50年)、柳川の環境を良くするために市役所に環境課設置
- ・全市をあげて堀割問題を1年半かけて検討、「手がつけられない」と結論。川下り用などの幹線水路は残して重点的に維持管理し、その他は埋めたり、都市下水路にする計画を決定

#### ⑤柳川の水よ、よみがえれ

- ・埋立て計画の再検討
- ・柳川はきれいにして残すべきだ。堀がなくなると遊水機能も失われる。水害にも弱い都市になる。ゆとりややすらぎも失われる
- ・地下水涵養機能が低下すると、地盤沈下も起こりやすい
- ・1977年(昭和52年)、市長が埋立計画の実施を6か月猶予、埋立計画の見直しをさせる。この頃川舟の通れない日多し
- ・1978年(昭和53年)、3月に河川浄化5か

柳川の水と観光の沿革及び観光客、川下り客数の推移（資料、市政要覧・市観光課資料）



年計画が議会決定

- ⑥住民総出で、ヘドロの堀へ入り浚渫作業
- ・住民懇談会で繰り返し計画の説明、協議・住民現地見学会をして、堀割の惨状を見る
  - ・住民だけの懇談会で、不法占拠の自主的撤去が話し合われる
  - ・住民総出で、3~4メートルおきにヘドロの水路の中に並び、皆がスコップでヘドロをかき出した。それをダンプで搬出した
  - ・浚渫は業者に一切たのまず、住民参加で市直営でやった
  - ・住民参加の浚渫が維持管理の力を呼びおこした
  - ・市民全部で川と付き合っていこうということで、全市を71ブロックにわけて維持管理の実施委員会

⑦観光川下り舟は現在170隻となっている

〈柳川の河川浄化計画は成功した〉

この柳川の河川浄化計画の成功は、地域の多くの人々が、きれいだった頃の堀割を記憶していたからだといわれている。もうあと何年かたつて、住民の管理によって美しい堀が維持され続けていた頃の人々がいなくなって、記憶が消えてしまったら、住民参加による浄化はできなかったらうといわれている。そのことは、市役所主導の浚渫が、維持管理に対する住民の協力がともなわれず、結局不成功に終わるとい

ことであれば、“志”がいかに大切かを示していることになる。つまり、地域にある記憶・志・知恵の次世代への受け継ぎが、地域づくりにとっていかに大切かを教えている。この浄化事業のプロセスを整理してみると次のようになる。

- ①住民がきれいにしようという意志をもつ  
→地域の人たちの心の一致がある
- ②浄化計画が決定される  
→システムが決まり、市の担当がコーディネーターとして位置付けられる
- ③浚渫作業は住民の総力と市役所の機器の協力で進められた  
→具体的な作業（ハード対応）がされる
- ④維持管理に対する住民参加→運営の安定
- ⑤観光川下り舟170隻→波及効果の発生  
これを整理すると、「記憶や思想の統一とシステムの決定・合意形成」が知的インフラを意味し、その上でハード対応をし、さらに運営があつて波及効果が発生したということになる。柳川の流れがよみがえった活動の中に、知的インフラの重要性を見出すことができる。

(糸乗貞喜)

障害を持つ児の母親の現在の生活  
について

服部メディカル研究所  
服部 万里子

今年の新入社員を大卒でみると、1971年に生まれた人が入社している。すでに日本が高齢化社会に突入（1970年）してから生まれた子供が仕事につき始めたのだと思うと感慨深いものがある。「高齢化対応」に福祉のフォーカスが当たることも当然という気がする。

障害者福祉やホームレス等の救貧福祉に取り組んでいても、“高齢化への対応”は大きな課題である。

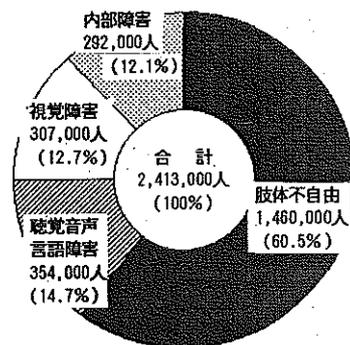
しかし、反面では心身障害児を持つお母さん方にとっては、「高齢者ばかりに焦点があたり、障害者（児）福祉が後回しになっている……」という不満や危機感も強いものがある。

〈障害児を持つ母親も働きたい〉

障害児やその家族の福祉に対するニーズを調査する仕事をした時のことである。

障害児を育てているお母さん方に集まっていたヒヤリングをした中で、「人によっては『障害児をもつと色々なお金がもらえて良いね』と言う人がいる。しかし、私達も普通のお母さんのように働きたい。そして、お金は子供の教育や訓練に使って欲しい。」という意見が出た。

障害の種類別にみた身体障害者数  
(昭和62年)



資料：厚生省社会局「身体障害者実態調査」

「特に障害児のことは直接その身になった者にしかわからないことが多い。福祉事務所や相談の窓口で私達のような母親が働けば、きっと子供が障害を持っていることを知らされて悩んでいるお母さん方に良いアドバイスができる。」ということだった。

この言葉の背後には、いくつもの相談窓口をたらい回しにされたり、病院を捜し回り、障害とある日突然に立ち向かわなければならぬ立場に立たされた母親の長く苦しい日々が積み重なっていたのだと思う。

そして、自分達の経験を人に役立てたいと願っているのである。

お母さん方の話を聞いて、がく然とした。行政施策に何を望むか、と質問したのに対して、お金よりも自分達の方が“良き相談者になれ

る”というのである。このことを聞いただけでもアンケートで調査を終わらずにヒヤリングで直接対話を持ったことの意味があったと私には感じられた。

加齢にしる、障害や疾病などにしる、多くの困難を持っている人は、福祉の受手だけではなく、担い手になることができるし、それを望んでいることもある。これを生かすことができれば、お母さん方も福祉行政も地域も大いに変わってくると思う。ノーマライゼーションとはこんなことを言っているのかもしれない。

#### 〈これからの時代に対応できる福祉サービス〉

今日の日本には約39万人の精神薄弱児（者）と242万人の身体障害者、9万3千人の身体障害児がいる。

医学の発達は逆の面では、多くの障害児を世に登場させた面を持っている。また、モータリゼーションの進展は、遠方でも在宅で世話をし施設に通うというように、家庭のニーズを変化させてきた。施設以上に重度な障害児を在宅でみている例も少なくない。

在宅支援のためのデイサービスや自立支援のグループホームなどの新しい課題を提起している。

そして何よりも障害児を持つお母さん方が望んでいるのは、「自分がいなくても子供が生きていけるようにする」ことである。そのためには、子供にも強くなって欲しいと望み、福祉

サービスにも、そのための支援を願っている。これからの時代に対応できる福祉とは障害児に与える福祉ではなく、障害者を社会に生かす福祉なのだと思う。

〈お詫び〉 前号で掲載しました服部さんのタイトルは「地域福祉に求められるサービスコーディネート」でした。編集部の手違いでご迷惑をおかけいたしましたことをお詫び申し上げます。

産直ドラマは手作りの味  
「八郎の壺」と鹿本郡市の試み

熊本県玉名市  
由富 章子

もっと街のことを知りたい。

中央のおしきせでなく、自分たちの手で物事を生み出したい。

そんな想いが熊本でドラマになりました。題して鹿本郡市スペシャル「八郎の壺」。一市五町という自治体がスポンサーになり、スタッフ、俳優すべて地元採用という、まったくの手作りドラマです。

ドラマが出来上がるまでが、またドラマであります。物語りはひょんなことから始まりました。

NHKの大河ドラマ「翔ぶが如く」を見た地元

の有志が、私（由富）に西南の役で散った宮崎八郎（ドラマでは矢崎八郎太）を主人公とした作品が出来ないものかと相談にみえたのです。それは面白い。ぜひやりましょう。とはいっても、ドラマ作りにはお金がかかります。最低でも1千万円は集めなければなりません。あやうくお蔵入りになりそうになったこの話に、KKT（熊本県民テレビ）、植木町が協力を申し出、他の5市町の賛同を得てやっと実現にこぎつけたときには、すでに2年の月日がたっていました。

善は急げ。さっそく各市町から役場職員を中心に実行委員会が発足し、ロケ地を初め鹿本郡市の魅力を生かせるよう綿密な打ち合わせが繰り返されます。予算が乏しいため、衣装、エキストラ等すべてボランティア。お金のない分は情熱でカバーし、官民一体となった地域おこし大作戦が展開されました。



ドラマ「八郎の壺」は、地元の小学生が偶然、西南の役に活躍した郷土の偉人、宮崎八郎のものと思われる壺を発見したことから始まります。

古墳時代の壺に刻まれた謎の古代文学。

壺をみてなぜかあわてる男、村瀬。

物語りは不老不死の薬を求めて日本に渡ったとされる古代中国、徐福の伝説にまでさかのぼり、生きることの意味を問いかけて行くのです。

さてこのドラマの中には、ふんだんに郷土の美しい風景が登場します。また鹿本でしか味わえない食べ物、人情、歴史が彩りをそえています。それらは地元のひとだけが知っている、本物の郷土の魅力なのです。そしてそれを伝えられるのは手作りドラマしかありません。

「八郎の壺」は熊本だけでなく、関東、関西圏でも放映されました。また自治体を通じて各地の公民館、図書館にも配布され、本放送から半年たった今でも日本のどこかで電波にのっています。

やればできる。始めは難色をしめしていた人達も、最後には自信とともに郷土の再発見に弾みがついたことを感じてくれました。私自身、この「八郎の壺」をはじめ、地元の文化、歴史に題材をとったドラマを書くようになってから、各地の良さが今さらのように目に止まるようになってきたのです。どんなところでも、どの町にも物語が眠っています。それを掘り起こすのは情熱しかありません。

今度はどこで新しいドラマが生まれるのでしょうか。その声を、情熱をわたしにも分けてください。そしていつの日か皆さんにお目にかかれることを楽しみにしています。

〔編集より〕今回原稿を頂いた由富さんから、次のようなメッセージも添えられておりましたのでご紹介します。

「八郎の壺」は、関東、関西でも放映され、五月にも山鹿市（熊本県）でドラマに関する講演を頼まれるなど、いまだに反響が続いています。おそらく全国でも15局ほどで放映されたでしょう。1千万円という金額から考えると、十分に作る価値があると思われる。他の地域にも火がついてくれると期待しています。

## テナント式伝統工芸村

### 「ゆのくにの森」

市町村の観光振興や地域おこしのお手伝いをしている時に、担当者から「『ゆのくにの森』は面白いですよ。」といった話を2~3度聞くにつれ、商売柄、先を越された感じがして、早く見学にいかなければと思いつつ、やっと去年の10月に金沢へ行く機会があり、かけ足で見えました。

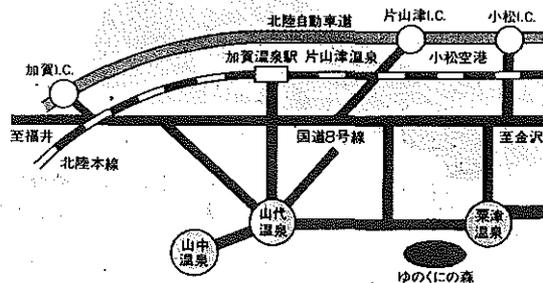
#### 〈全国でも数少ない民設、民営型工芸村〉

この工芸村は、加賀の温泉地の一つである山代温泉にある「ゆのくに白雲閣」の社長が所有していた約40haの土地（実際施設が建っているのは5~6ha程度）に副社長である女将さんの企画で事業化に踏み切り、昭和63年にオープンしています。

ここは、全国でも数少ない民設、民営の工芸村であり、温泉とセットになっていることから観光客誘致に大きなプラスとなっているようで、旅館から直送バスが定期的に出ています。また、私が朝10時のオープン早々に入村した時には、既に2~3台の団体観光バスが入って来ていました。

#### 〈伝統工芸の新しいスタイルの商業施設〉

オープン当時は、ホテルの物販部門を補う程度のものでしかなかったそうですが、徐々に拡

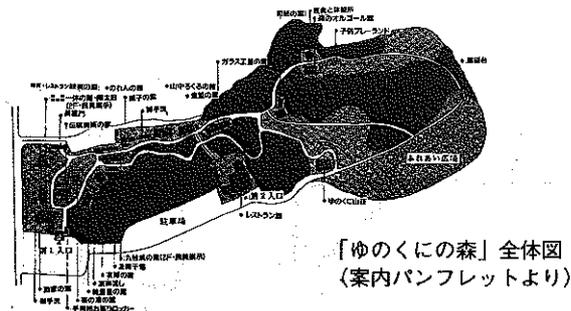


「ゆのくにの森」位置図（案内パンフレットより）

張され、広大な敷地の中に古民家や藁葺き屋根の建物が移築され、これを工芸の館や飲食店に利用しています。工芸の内容としては九谷焼、加賀友禅、金箔、輪島塗、ガラス工芸など石川県が全国に誇る伝統工芸品を一堂に集めて展示され、また、各館毎に簡単な手作りコーナー（九谷焼体験コーナー、山中塗の蒔絵、輪島塗の沈金、和紙漉など）が設けられており、ある程度時間をかけて楽しむ仕掛づくりもできていました。

この工芸村で「ゆのくに白雲閣」自ら運営している館は、メイン出入口部分にある物産館と金箔の館の二つのみで、他の館はすべてテナントとして入店しているとのことで、工芸村商業施設といった形態です。

民営型であるため、各施設毎の商売熱心さが伝わってきて、人吉のクラフトパーク（公設、公営）と比べると全体的に人も多く活気が漂っ



ており、平日にもかかわらず昼近くには多くの人が入場しています。日祭日には狭い散策路に多くの観光客が、所狭しと行き来する様子を想像すると、ゆっくり工芸を親しむといった感じというよりもまさに、工芸村市場といった雰囲気だろうと思いました。(山田龍雄)

### 神戸・布引ハーブ園を訪ねて

まず心を動かされたのが、ロープウェーから眺めた景色の素晴らしさだった。神戸の街並み、港、そしてはるかに広がる海、空。ロープウェーに乗ってから約10分間、この絶景に見とれているうち、あっという間に布引(ぬのびき)ハーブ園に到着した。

このハーブ園は、丘陵を利用して作られたもので、頂上から展望レストハウス、森のホール、クラブハウスといった建物が点在し、その間を埋めつくすように様々なハーブが植えられている。その数は約150種・75,000株もあり、約70種のハーブが植えられた「ハーブの見本園」、香りを楽しむ「香りの芝生」、青い花を集めた「ブルーガーデン」など、特徴のある各ゾーンがあり、その間を散策できるようになっている。

料理のスパイスとして使うハーブ、ハーブテ



ィーなど、店で売っている乾燥させた状態のものしか知らなかった私は、“生きている”姿を見たのはこれがはじめてだった。ハーブの効能は多く、それらを活用している人も多いだろうが、このような形でハーブを知っている人はどのくらいいるだろうか。その小さな花はとても愛らしく、ハーブを楽しむというのは実際に庭で育て、花をめで、そしてスパイス・香料として活用することなのだとなんと納得した。

神戸の景色を眺め、ハーブを楽しみ、最後にハーブティーを味わって、心も体もリフレッシュされた一日だった。(富重慶子)

## 春、溪谷にて

## —英彦山キャンプ場—

花の季節がやってきました。わが家の庭も若々しい春の緑とともに色とりどりの花が咲きはじめ、香りとともに春の訪れを感じさせてくれます。天気の良い週末、英彦山へキャンプにくり出すことにしました。

市内を抜け目的である英彦山中に向かう途中、車窓には新しい生命の息吹を感じさせる青々とした緑と、色彩豊かな花々が広がり、太陽の光もすっかり春。穏やかな景色の中にも春の賑わいも感じます。

麓から車で15分ほどの英彦山中腹には多くのキャンプ場があります。まだシーズンオフでキャンプ場は封鎖されていたため、私たちはその周辺でテントをはったのですが、ここは夏になると多くの宿泊客で賑わいます。

まずは溪流釣りです。

川虫やみみずなどを餌として扱えるようになったばかりの私も、今日はそれ相応のスタイル（溪谷を歩くので、安全のため足回りの装備等も大切）でヤマメ釣りに挑戦します。溪流は、時に滝、時に荒瀬と、変化に富んだ表情を次々に見せてくれます。そして流れに沿って山中を2時間ばかり、しかし成果は…。

釣りは他の人に任せておいて私はつくしを摘

みに行きました。

ニョキニョキとはえたその様は愛嬌があって摘むのは可哀そうという慈悲の心と食欲に心は痛みながらも次々と。近くには瑠璃色の花をつけたヤマリソウや黄色のキンポウゲなど春の草花も咲いています。他にもいろいろ愛らしいものがありましたが名前が分からないのが残念でした。

さて、夜食は途中おばちゃん達が採取した椎茸と持参の肉を焼いて、ビールを飲もうか、ちょっと寒いので温かいお酒にしようか、と気分は大いに盛り上がっていたのですが、大事な鍋類を忘れてしまい、結局インスタントのポップコーンのアルミで細々とお湯を沸かし、なんとか温かいお酒にもありつき、無事野外宴会が始まりました。

宴の後の夜はとても静かで、星がとても近くに感じます。遠くに聞こえる「ウォーン」という声は何なのかと少し不安も感じながら、まだ幾分冷え込む山夜の中で眠りにつきました。

翌朝、ホトトギスの鳴声で目覚めた後は、英彦山の水でコーヒーを沸かし朝食を取ると気分は最高です。こんな元気な朝を迎えると何でも出来そうな気がします。元気に楽しく、春の自然に遊んでもらった2日間でした。

(大石陽子)

## 今号の表紙

## —築城町「本庄の大クス」—

表紙の楠木は福岡県築上郡築城町にあります。築城町は福岡県の東、瀬戸内海寄りに位置し、北九州市小倉から電車で約30分ほどの距離にあります。南北に長く、土地の大部分が森林に包まれた緑豊かな町で、伝統芸能としての神楽や由緒ある神社が多く残る歴史的な町として、また航空自衛隊築城基地のある基地の町としても知られています。

国道10号から城井(きい)川に沿って上流へ車で約20分ほど、「本庄の大クス」という表示を頼りに右折、神社の鳥居を抜けたところ、大楠神社の境内にその大クスはありました。田畑の中で美しい山間を背にポツンと佇んでいます。



この楠木は樹齢約1800年、根回り32m、高さ20m。大正11年に国の天然記念物に指定、昭和63年の環境庁による全国巨樹調査では全国三番目の巨木に認定されています。その葉には古くから「寿命長久の霊験」があるといわれ、身につけてご利益にあずかる人も多いそうです。想像よりもはるかに大きく、思わず「わあ、大きい」という声が出てしまいました。近くに寄ってみると、ゴツゴツとした樹肌に歴史の重みがあります。重くなりすぎた支枝の中は人工の支えを必要としているものもありますが、2000年近く経った今なお、多くの葉や実をつける生命力には威厳のある力強さを感じます。

地元ではこの大クスを活用した地域おこしグループ「大楠会」(会員18名：中野良太会長)が、苗木の里親募集や葉っぱのお守り・テレホンカードの作成、恒例事業「夏まつり・大楠」で結成十五周年に企画された花火大会や大楠の



夏まつりで活動する大楠会のメンバー



「夏まつり・大楠」での花火大会

ライトアップなどの活動を行っています。このユニークな活動は町内外で反響を呼んでおり、地元の新聞にも紹介されています。

楠木を市町村の木に定めているところは福岡県内だけでも20ヶ所以上あるため、大楠会では今後「楠サミット」の開催など、いつの日か大楠を核に他市町村との交流ができれば、と夢をふくらませています。長い間地元の人に親しまれてきた「本庄の大クス」。近い将来には地域と共にその根や枝葉を全国に向かって広げていくことになりそうです。(北村茂樹)

### フレッシュマン紹介

4月から、2人の新入社員を迎えました。  
二人共々よろしくお願い致します。

左：尾崎正利（23才）福岡県大野城市出身  
西南学院大学商学部商学科卒

○九州の小さな市町村に活力を与える仕事ができるようなプランナーになりたい。

右：伊藤聡（24才）福岡県直方市出身  
熊本大学工学部建築学科卒

○ひとがしあわせを感じるまちづくりが目標。



## さらば白木原のネオン街よ....

私の育った大野城市には、その昔、近くに米軍部隊のベースがあった。そこは現在『春日航空自衛隊』の基地となっている。父の話では、朝鮮戦争当時、板付空港（現福岡空港）から発進する米空軍の日本の最前線基地だったそうだ。

1950～70年代、そして現在に至るまで、日本中の『基地の町』は基地があるからこそ活気づいていた。安保闘争やベトナム反戦などの平和デモ活動で世間が揺れている時代にも、基地のネオン街は賑わっていたのである。佐世保やコザ、横須賀などの有名な町だけでなく、私の近所の白木原、雑餉隈もそういう小さなネオンの町であった。

そしてここ20年の間、米軍のベースが引き上げると同時に日本の基地の町もにぎわいをなくしたのと同様、白木原、雑餉隈も同じ運命を辿ったのである。

西鉄大牟田線の高架工事のため、白木原の老朽化した建物を撤去するという話を聞いたのは最近のことだ。私は近くの街が取り壊されると聞いて、無性に行ってみたくなった。あの、あやしくもかなしい光のネオン街に....。そして高校生の頃から行きたかった一軒のホルモン屋に足を運んでみた。

入った店はカウンターだけのこじんまりした

店、客は誰もいない。お香の匂いが漂っているところをみると、御主人は年配の方なのかと思っているうちに、出てきたのは両切りピースをくわえてスカーフをしたオバさんだった。やはり元「基地の町」なのだ。

基地という支えを失った街は、廃屋と静けさだけが目立つ。それでも50年代の時代錯誤な風景を見ていると、失われた歴史の匂いがしてくるような気もする。茶けた張り紙やタイル張りの金魚漕....。

オバさんは「築60年にもなるもんねえ」と言っていて壊される自分の店を見回していた。なんだか急に気弱な顔になって、いたずらにタバコの煙をくゆらせていた。（尾崎正利）

## 阿蘇山の雲海

熊本で学生をしていた去年の秋の事。

昼間にわか雨が降り夕方晴れた、そんな日だった。私はいつものように夜をふかし、午前三時頃下宿の離れにある風呂に行った。外は濃い霧で、近くの街灯もにじんでいた。「雲が地上にたまるとるようなもんやな」と適当なことを思った次の瞬間、「阿蘇に雲海が出るかも知れん！」と頭に浮かんだ。

“年に1回か2回、春か秋、空気の温度が上下逆転したときに雲海が出る”という知識だけ持

っていたのだが、今日がその日に違いないと思い、“授業はない、車はある”状態だったので行くことに即決定。今回を逃したら二度と見れん。夜明け1時間半前、ボンコツシャレードで霧の中を山へ向かった。

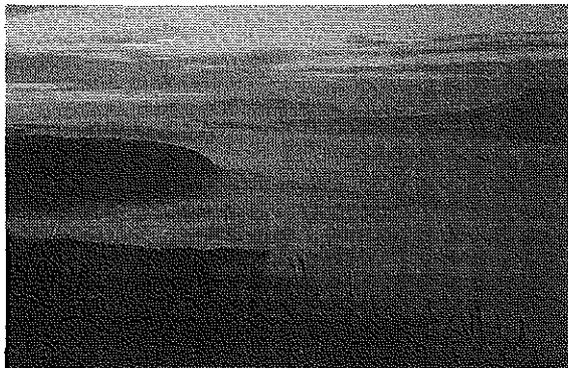
途中ガソリンが残り少ないのに気付いたが、スタンドはまだ開いてない。止まれば歩いていく覚悟で阿蘇北外輪山の名展望所、大観峯を登った。登る途中で雲を突き抜けたその瞬間、私は思わず車を降りて振り返った。体じゅう力が入るような、それでいて体の力が抜けるような、そんな感動がそこに広がっていた。

十数分後、大観峯に着いた。これがあこがれ続けた阿蘇の大雲海。阿蘇谷の白い布団に涅槃像が横たわる。カルデラの中が数万年前（もっと前かな）湖だったのを雲海によって再現しているのだ。見慣れた阿蘇だが、今日は格別だ。

カメラマンやライダーも数人来ていた。みんなちゃんと知っているんだ。

朝日が昇ってもすぐには消えない雲海は、帰る決心をにぶらせ続けたのだった。

(伊藤 聡)



4月から2人の新人がメンバーに加わり、所員数も10人を越えました。これまで以上に新しいことに取り組む体制が少しずつですが、整いつつあります。

当社が九州事務所として出発したのが昭和51年（1976）、そして今の会社になったのが57年（1982）ですから、丸10年が経ったこととなります。私がこの仕事に携わってきた期間も同じですが、この間に毎年数百人以上の人と知り合い、そしてこれらの人のつながりから新しいテーマや仕事に取り組むという、まさにネットワークをベースとして仕事をしてきたことを実感しています。

今後さらに多くの人とのネットワークづくりを進めながら仕事を行っていくことは、地域づくりにおける我々の存在価値として大きな比重占めていると思っております。6月4日、これまでの10年間の活動の1つの区切りとして、何か記念になることをやろうという所員の思いから、ささやかなパーティーを開催する予定です。

(辺)

---

## よかネット NO.3 1993.5

(編集・発行) (株)九州地域計画研究所  
〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F  
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

### (ネットワーク会社)

|                  |                  |                  |
|------------------|------------------|------------------|
| (株)地域計画建築研究所     |                  |                  |
| 本社 京都事務所         | TEL 075-221-5132 | FAX 075-256-1764 |
| 大阪事務所            | TEL 06-942-5732  | FAX 06-941-7478  |
| 名古屋事務所           | TEL 052-962-1224 | FAX 052-962-1225 |
| 東京事務所            | TEL 03-3226-9130 | FAX 03-3226-9560 |
| (株)服部メディカル研究所    | TEL 03-3465-3147 | FAX 03-3469-4388 |
| (株)地域づくりネットワーク   | TEL 06-357-2725  | FAX 06-357-2740  |
| (株)地域総合プランニング研究所 | TEL 092-714-5297 | FAX 092-714-5298 |
| (株)未来プラン         | TEL 092-722-0220 | FAX 092-722-1391 |